

## 14 世紀における「世界経済」としての西スーダン

### 目次

#### はじめに

#### 1. 『大旅行記』について

#### 2. 「世界経済」としての西スーダン

##### 2-1. ウォーラーステインの「世界経済」

##### 2-2. イブン・バットウータの世界観

##### 2-3. 社会的集団

###### 2-3-1. 「白人」と「黒人」

###### 2-3-2. ベルベル

###### 2-3-2-1. マッスーファ族

###### 2-3-2-2. バルダーマ族

###### 2-3-2-3. ジャズーラ族

###### 2-3-2-4. 覆面の民

###### 2-3-3. アラブ人

###### 2-3-4. 商人集団

##### 2-4. 言語

##### 2-5. 生業

###### 2-5-1. 農業

###### 2-5-2. ビーズ

###### 2-5-3. 織物

###### 2-5-4. 製鉄

##### 2-6. 交易と通貨

##### 2-7. イスラーム

#### 3. 「世界経済」

##### 3-1. 交通

##### 3-2. 帰属意識

##### 3-3. 生業と人びと

##### 3-4. 総括

#### 結論

#### 註

#### 文献目録

## はじめに

サハラ砂漠を越えた南北地域の交渉が活発化するのには、イスラームが成立した7世紀の後半から8世紀の初めにかけて、アラブが北アフリカの征服を成し遂げてから後である。しかし、すでに先住のベルベル系住民を中心に、かなりのサハラ交易が行われていたらしい(註: 1)。アラブの征服後も、ベルベル商人がサハラ交易の中核を占め続けた。サハラ交易の主な交易品として、北から運ばれたものは岩塩、ウマ、装身具などの奢侈品、南からは金、奴隷であった。なお西スーダンのイスラーム化もこの交易により、おそらく8世紀に遡る。またイスラーム化が商業活動を通して平和的におこなれたことと先にイスラーム化した黒人諸族によって伝播したことの2点が特徴的である(川田 1993)。先に西スーダンと書いてしまったが、本稿で述べる西スーダンとは、北アフリカやエジプトの人々が「ピラード・アッ・スーダン」、「黒人たちの国々」と呼んだ「歴史的スーダン」の西部、北のサハラ砂漠と南のギニア湾岸の森林地帯に挟まれたサバンナ地帯のうち、ニジェール川大湾曲部から大西洋沿岸にまでおよぶ部分である。坂井(2003)は、西スーダンは差異と交換のシステムによって多様な諸集団を複合的に編成しつつ、同時に長距離交易によって広域におよぶ空間枠組みを形成した社会・文化的統合態であり、その歴史的起源は13~15世紀のマリ帝国にあるとしている。1077年のアルモラビットの聖戦により衰退したガーナ帝国も同様であるが、マリ帝国は、王国としてかなりの独自性をもって後世まで存続している。また、帝国の支配といっても重点は黄金を入手する地点とサハラ南縁の交易都市、およびそれを結ぶ交易路の「点と線」支配であり、地方の王や首長という「人の支配」にあって、面としての領域の支配ではなかった(川田 1997a)。そうした政治的要素、また前述の社会・文化的統合態から、坂井(2003)は、ウォーラーステイン(Wallerstein)のいう、政治的統合を欠きながら経済的統合を維持するひとつの「世界経済」ないし「世界システム」を西スーダンに適応できる可能性があるとしている。もっとも、坂井(2003)は、広大なイスラーム世界のなかに比較的独自性の高い一つの世界システムとしての「西スーダン」が、近代ヨーロッパシステムに「西アフリカ」として組み込まれていく過程を考察し、あくまでも西スーダンにおいて交易を担ったムスリム商人たちのイスラームの実践を世界史的文脈に位置づけることを目的としていた。しかしながら、14世紀の西スーダンを旅したイブン・バトゥータ(Ibn Battuta)の『大旅行記』(家島 2002)の生き生きとした高度に発展した西スーダン社会の記述の中から、筆者はすでに高度に発展した「世界経済」として、西スーダンをとらえることが可能ではないかと感じた。

以上の議論を踏まえ本稿では、近代以前の、特に14世紀の西スーダンの社会構造が、ウォーラーステインの「世界経済」という概念に合致することを提示する。具体的には、イブン・バトゥータの『大旅行記』(家島 2002)を中心とした西スーダンに関する文献を参照し、社会的集団、言語、生業、交易と通貨、イスラームという要素から、西スーダン社会の構造的特徴に明らかにする。そのために、「世界経済」の基本的条件である「一体感」や「地理的な分業」が、その地域内部の自給性・自発性によって検証可能であることを示し、14世紀の西スーダンが「世界経済」として成立していたということを提示したい。

## 1. 『大旅行記』について

『大旅行記』の正式の題名は「諸都市の新規さと旅の驚異に関する観察者たちへの贈り物」であり、イブン・バトゥータから直接伝え聞いた話をイブン・ジュザイ(Ibn Juzayy)が編集し1356年に完成した。イブン・バトゥータは1304年にジブラルタル海峡に面した港町タンジャで生まれ、1325年に巡礼の旅に出て、アラビア半島全域、東西アフリカ、バルカン半島、南ロシア、中央アジア、インド、東南アジア、中国などを訪れた。彼がイスラーム法学者であり、なおかつベル系のラワータ族の出身であったことによる、彼の視点のユニークさ、また等身大の視点で他に記録がない地域を含む広範囲な世界を叙述したことが評価されている。しかしながら、最近の研究者たちは、極めて史料価値が高いものであることを認めながらも、中国などの旅行の記述に疑問点や矛盾があることも指摘している(家島 1996)。

イブン・バトゥータのスーダン地方への旅は1352年、スイジルマーサを発ってから始まり、マーッリー、トゥンプックトゥー、カウカウを経て1354年にモロッコのマリーン朝の首都フェースに帰着し終了している。スーダン地方に関する記述は、彼と同時代のウマリー(al-Umari)やイブン・ハルドゥーン(Ibn Khaldun)の記録と並んで西スーダン史に関する基本史料として高く評価されている(家島 2002)。また、スーダン旅行の記載内容は『大旅行記』の他の部分の叙述とかなり異なり、きめ細かい、生き生きとした描写に富んだものである。このことと当時の政治的背景から、家島(2002)はイブン・バトゥータのスーダン旅行の目的がマリーン朝によるスーダン地方の調査であったと推測している。

本稿では家島彦一訳註の『大旅行記』を参照した。なお、西スーダンに関するアラビア語史料のほとんどは、クオーク

クオーク(Cuoq 1975)によって詳細な注釈付で仏語訳され、西スーダン中世史研究家のほとんどの研究家がクオーク版資料集に頼っている(嶋田 1991: 84)。また、レヴツィオンとホブキンス(Levtzion et al. 1981)による英訳資料集が出版されているが、質量ともに仏語版を簡略化したという形のものである(嶋田 1991: 84)。

## 2. 「世界経済」としての西スーダン

### 2-1. ウォーラーステインの「世界経済」

残念ながら筆者は、ウォーラーステインの「世界システム」の理論を十分に理解しているとは到底いえない。しかしながら、本稿でウォーラーステインの「世界経済」の概念を用いる以上、その概念を明らかにしなければならない。まず、ウォーラーステイン(1981)の第1章「近代への序曲」と最終章「理論的総括」から「世界経済」の概念を明らかにしたい。以下は、筆者なりのその要約である。

「世界システム」とは固有の境界と組織構造と構成員、何らかの法体系、一体感などを持った社会システムである。社会システムが社会システムであるためには、その内部での生活がほとんど自給的で、その発展のダイナミクスが主として内発的なものであることが必要である。「世界経済」とは、あくまでも経済上の統一体であって、地上のいかなる法的に規定された政治単位をも凌駕しているという意味で世界的である。むしろ、「世界経済」は文化的な紐帯によって多少は補完されているし、究極的には政治的な連携やときには同盟関係によってさえ補完されているが、基本的なつながりは経済的なものである。近代以前の「世界経済」はどれも構造的にきわめて不安定で、まもなく「世界帝国」に転化してしまうか、まったく分解してしまうか、いずれかの道を辿った。「世界帝国」とは、政治単位であり、政治的に中央集権されている。そのため、周辺部から中央への富の流れを強制力と交易の独占によって確保できたが、利益の大部分を飲み込んでしまう官僚制が不可欠であった。資本主義的「世界経済」において、国家は中心的な経済主体というより、他者のために交易条件を一定に保つ手段と化している。また、「世界経済」の規模は技術水準、とりわけ域内の交通・通信の水準に対応している。具体的には、フライド(Ferdinand Fried)とブラウディール(Braudeal)の研究によると、最も早い交通機関を利用するとして60日で移動できる範囲内である。技術水準は変動するので、「世界経済」の境界は流動的であった。「世界システム」における分業とは、たんに機能的な分業、つまり職種に関するものだけでなく、地理的な分業をも含んでいる。帝国の政治機構が職業と結びついた文化を生み出しがちなのに対し、「世界経済」の政治機構は地理的な位置関係を基準にした文化を作り上げる傾向がある。「世界経済」は高度な技術と資本を有し、強力な国家機構が作られ、同時に国民文化が形成される中核諸国家とその中核に搾取される辺境地域に分けられる。「世界経済」はまさにその発展過程で、地域間の経済的・社会的格差を拡大する傾向がある(ウォーラーステイン 1981)。

以上のウォーラーステインの理論から、「世界システム」としての西スーダンを把握するには、固有の境界、組織構造、構成員、何らかの法体系、一体感、地理的な分業を明らかにし、その内部が自給的で自発であることを証明しなければならない。しかし、組織構造や法体系はイブン・バットゥータの記述からは情報が極端に不足し類推が不可能である。坂井(2003)が指摘するように、強烈な中央集権国家の不在とマリ帝国がベルベル商人とワンガーラと呼ばれるスーダン人の商人に交易条件を一定に保つ手段として機能していることから、西スーダンが「世界帝国」ではなく「世界経済」として形成されていたと思われる。なお、本稿で考察するのは14世紀の西スーダンであり、「世界経済」の初期段階であるので中核が辺境の搾取を開始する以前の状態であったと考えられる。

### 2-2. イブン・バットゥータの世界観

ベルベル系ラワータ族出身タンジャ(註:2)生まれ、ラワータ族は北アフリカ地域に広く分布するベルベル族の中の主要民族のひとつでアラブ征服のころにリビアからエジプト国境付近からその一部はアルジェリアやモロッコ各地に移住した。マスムーダ系やサンハージャ系とは違ったラワータ・ベルベルのアイデンティティをもっている。また、彼はイスラーム法学者でもあった(家島 1996)。

イブン・バットゥータは、(1)ニジェール川をナイル川の支流だと考え、(2)西スーダンで輸出される金と東アフリカのワヒリで輸出される金との出所が同じだと考えており、(3)現実よりも非常に西スーダンからエジプトの南のヌビアまでの距離を現実よりも非常に短く想定している(家島 2002: 37)。以上の3点からイブン・バットゥータはサハラ以南のアフリカに一つの文化圏を持った黒人たちの世界を想定していたと推測される。しかし、そうした世界はイブン・バットゥータにとって、例えばマルコ・ポーロ(Marco Polo)にとってのほとんど未知の存在であるジパングとは違った、より現実味のあ

る存在だったと思われる。イスラーム世界内での交流は非常に活発であり、家島(1983: 203)によれば、12世紀後半までの時期には、マグリブ地方と東方の諸地域との間の人的コミュニケーション、物資の交換と情報・知識の伝達関係には、概して大きな障害と隔たりはなく、自由な幅広い交流と融合の諸関係によって結ばれていた。サハラ沙漠を介した南北交流も相当盛んだったようで、イブン・バトゥータは巡礼経験のあるスーダン人もベルベル人も、同じように「メッカ巡礼の経験者の」「巡礼経験者の」という説明だけで、スーダン人だからといって特別に言及されておらず、イブン・バトゥータにとって、同じムスリムであるスーダン人が巡礼を果たすことはまったく想定の外なことではなかったと推測される。他方、金の鉱山のある地域に住む異教徒については、食人の習慣があるといった記述をしている(家島 2002: 61)ことから住民の大半は異教徒であるという点において、彼らがイブン・バトゥータにとってまったく違う世界に住んでいたと考えられる。このことに加えて、イスラーム法学者としてのイブン・バトゥータが西スーダンのムスリムたちの異教徒的な振る舞いにたびたび不快感をあらわにしていた(家島 2002: 30, 31, 53)ことも考慮にいれば、イブン・バトゥータは異教徒や異教徒的要素を内包するもののひとつのイスラーム世界として西スーダンを認識していたのであろう。

### 2-3. 社会的集団

ここで扱う社会的集団とは、民族ではない。民族を定義することの煩雑さや極端に情報が少ないことを考慮し、ただ単純にイブン・バトゥータが差異を認めた集団を便宜的に社会的集団とした。西スーダンの構成員であるその社会的集団について書き出し、西スーダンの一面を捉えようと思う。

#### 2-3-1. 「白人」と「黒人」

イブン・バトゥータは、「白人」と「黒人」という人種的差異を第一に感じていた。「黒人」については、「白人」を侮辱する礼儀作法の知らないスーダン人について侮蔑的に「黒人」(al-aswad)と呼んだ場面が1回あり(家島 2002: 28)、食人種が「白人」と「黒人」を区別して呼んだ場面が1回(家島 2002: 61)あるが、それ以外の「黒人」はすべてスーダン人(al-sudani)としていいる。一方、「黒人」という名称に比べ、「白人」という名称は肌が白く外来者であるベルベル人やアラブ人といった人たちを一括して「黒人」に対する対義語として非常に多く使われている。具体的に述べると、(1)前述した軽蔑される対象として(家島 2002: 27)、(2)「白人たちが食べると害がある」といった食習慣があわない他者として(家島 2002: 34, 35)、(3)「マンサ・ムーサ(Mansa Musa)(註:2)は、白人たちを寵愛し、優遇した」(家島 2002: 54)とあるように、マンサ・ムーサがメッカ巡礼のついでに詩人や建築家を連れて帰った(家島 2002: 54)ことから、この文脈では、商業・文化促進を促す人々として、(4)同じ町でも住む地域を別にしたり、モスクを別にしたり(家島 2002: 39)、金鉱山に行くことを許されなかったり(家島 2002: 37)、また、「スーダンで死んだ白人の財産は正当な相続人がその財産を受け取るまで信頼できる白人に預けておく」(家島 2002: 56)という記述から財産においても徹底した分離がみられ、不可侵の別の世界に住む他者として、以上の4つの角度から捉えられている。これらはそのままスーダン人から見た「白人」像を反映していると考えられる。(4)については、阿部(1999)のいう「双極論」が背後にあるように思える。「双極論」とは、アフリカ諸民族の世界観にしばしば見られる特徴の一つであり、対立する異質なもの同士の拮抗と交流が創造のプロセスであり生命力の源泉であるとし、完全な存在は異質な2つの極を備えていなければならない、という考えである(阿部 1999)。西スーダンのスーダン人は、居住区や財産、イスラームの実践において、「白人」との一定の距離を保つことによって両者の秩序の混乱を防いだ。より具体的には、スーダン人は、西スーダン内での「白人」たちの安全や自治を保障する一方で、自分たちの社会に対しては干渉を許さず、相互の利益を確保したのであろう。他者を同化するのではなく、その他者との自己の差異を明確にすることによって排除するのでもなく、差異を強調することで相互の協力関係を築いていると筆者は考えている。

#### 2-3-2. ベルベル

前述したようにイブン・バトゥータ自身がベルベル出身であるため、ベルベルにはいくつか区分がなされている。なお奇妙なことに後半になってイブン・バトゥータは2人の人物をベルベルではなく、マグリブ人と記述している(家島 2002: 70-71)。マグレブ諸国とは、モロッコ、アルジェリア、チュニジアであり、広義では、リビア、モーリタニア、西サハラを含める。マグリブ人とされた2人はともに現在のモロッコ出身であった。マグリブ諸国の住民の大半がベルベルであることを考えると、イブン・バトゥータの気まぐれではないかと思われるが、過剰な深読みをすれば、マグリブ地方に移住したアラブ人をさすために故意に使った可能性もある。しかし、いずれにしても大した問題ではないのでここで

はマグリブ人とベルベルが同じ人々を指しているものとして考える。

イブン・バットゥータはベルベルをさす場合に、ベルベルの何族かを記述する場合と何族か記述せずただ単にその人物の出身地のみをあげる場合との2つのパターンがあった。何族か記述されなかった人達の出身地にはなんら関連性はなく、彼らが同じ社会的集団に属していたとは考えられない。単純にイブン・バットゥータは何族に属しているのかわからない人物については何も記述していないのではないかと筆者は推測する。1つの例外を除き(註:5)、あるベルベル人とその集団にイブン・バットゥータが会ったときのみ、何族かイブン・バットゥータは記述している。つまり、ベルベル人の諸族間に個人の外見や話し方に判別できるほどの差異がない、あるいは、差異はいちいち確認する必要がないほど重要でない、ということであらわしていると思われる。

ベルベル人に関して、イブン・バットゥータはそれぞれの出身地をあげている。以下が具体的な地名である。トレムセン(現在、アルジェリア国の西部の主要都市、モロッコ国境に近い)、ターダラー(中部モロッコのタードラー地方)、トゥワート(現在の南西アルジェリアの地域名で、行政的にはアドラル地域に属する)、マツラークシュ(モロッコ南西部の町)、ミクナーサ(モロッコ南西部の町)、ジャーナート(おそらくアルジェリアのタッシリ・ナジュールのオアシスのひとつ(家島 2002: 137))、グラナダ。14世紀のマリーン朝はアブー・アルハサン(Abu Al-Hasan)(在位 1331~1348)やアブー・イナーン(Abu Inan)(在位 1348~1359)の治世に王朝は全盛期を迎え、1347年には奪われたトレムセン・チュニスを奪還している(那谷 1984)。「大旅行記」に記述されるスーダンに居住するベルベル人は14世紀初頭に生まれていると思われるが、グラナダを例外として、彼らの出身地は大まかにマリーン朝のモロッコの影響があった地域であるといえる。こうしたことから、西スーダンとの交易は、ほぼモロッコのベルベルによって独占されていたと考えられる。

イブン・バットゥータによると、ザーガリー村の白人たちの一団が住んでおり、ハワーリジュ派(註:8)のなかのイバーデー派(註:9)の教義に則り、<サガナグー>と呼ばれ、一方、白人のなかのスンナ派信奉者で、マーリク派(註:10)法学の人々は、彼らのもとでは<トゥーリー>と呼ばれていた(家島 2002: 36)。注釈によると、サガナグーはソニンケ出身の上級クランで、デュラのなかの名士層サガノゴを指し、イブン・バットゥータは、白人、つまり地中海世界の諸都市から来訪するベルベル系ムスリム商人たちを二つの集団に分類しているが、実際にはいずれも同じマンデ系の人々を指したと思われる(家島 2002: 99)。同じく注釈によると、トゥーリーについては、ソニンケ語やハウサ語などの西スーダンの諸語において、トゥーリーは等しく<白人><外国人><外来人>を意味し、おそらくマニンケのなかで、ベルベル人のスーフィー教団マラブートの影響を受けた人々を指したと思われる(家島 2002: 99)としている。しかし、マリのスンジャータが指名した五つのウラマーのクラン(註:11)のトゥレとサガノゴに「トゥーリー」と「サガナグー」の語感が似ており、同一のものを指すのではないかと筆者は考えている。

さて、イブン・バットゥータが知っていたベルベル諸族は4つの集団である。(1)マッスーフア族(2)バルダーマ族(3)ジャズーラ族 (4)覆面の民のハッカール。以下、それぞれの集団を順におって考察する。

### 2-3-2-1. マッスーフア族

マッスーフア族に関する注釈については、スイジルマーサからタガーザーまでのイブン・バットゥータが同行したマッスーフア族であるキャラバンの隊長に関するものとトゥンプクトゥの大半の住民が顔にターバンを覆ったマッスーフア族であることに関するものとの2つがある。1つ目の注釈では、マッスーフア族はサンハージャ系ベルベル族で、イブン・バットゥータの時代にはサハラ全域で活動していた(家島 2002: 87, 88)とある。2つ目の注釈は、マッスーフア族はサハラ西部からニジュール川北岸のサヘル地帯にかけて広く生活圏としていたベルベル系遊牧民、現在のトゥアレグ族(家島 2002: 128-129)としている。嶋田(1997)によるとトゥアレグはイスラーム化以前からサハラ内部との交流をもっていたベルベル系住民でターバンを顔に覆った出で立ちで知られる遊牧民であるとし(嶋田 1997: 186)、サンハージャはサハラ西南部にいたマーリク派を奉じてアルモラビットの聖戦を起こした遊牧民であるとしている(嶋田 1997: 190-191)。私市(1983, 2004)によれば、サンハージャ族、あるいはサンハージャ系ベルベルとは、「ベルベル系民族の三方言群(マスムーダ、サンハージャ、ザナータ)の一つ。ムラービト朝を建国したベルベル集団はサンハージャ系に分類される」(私市 2004: 9)集団であり、11世紀中葉では「ムラービト=平野の遊牧民 Sanhaja」(私市 1983: 7)とされる遊牧民である。

トゥアレグとサンハージャのどちらが片方の母体集団であるかについては、混乱が見られるが、いずれにせよ、トゥアレグとサンハージャは互いに重複する要素をある程度もった集団であり、マッスーフア族はトゥアレグの一派とするのが妥当であると考えられる。

さて、マッスーフア族は、西スーダンにいたベルベル人のなかで「大旅行記」に登場する頻度が非常に高い集団である。彼らは、(1)スイジルマーサからマーッリーまでイブン・バットゥータに同行した行商人(家島 2002: 17)であり、(2)タクシーフからイーワラータンの間で飲料水を販売し(家島 2002: 26)、(3)イーワラータンでスーダン人の長官に仕え(家島 2002: 27)、(4)イーワラータンとトゥンブクトウの大多数の住民である(家島 2002: 28, 64)。以上の4点から彼らは非常に広範囲を多角的に活動していたことがわかる。14世紀には、スイジルマーサからマーッリーにかけて西スーダンの中央部に南北に伸びるファッスーフア族の活動圏を確立し、北アフリカと西スーダンの境界を中心にして2つの世界をつなぐ存在として活躍していたと思われる。具体的には、塩金交易のみならず(2)のような南北の人の流れを促進するような活発に行っており、(3)だけでなく緩やかな男女関係や特殊な命名方法(註:4)、特殊な相続制度(註:5)をうけいれ、(4)のように定住することによって西スーダンの政治・文化にかなり順応していたと思われるが、礼拝の義務をしっかりとこなし、イスラーム法学を理解し、コーランを暗誦し、さらには巡礼も比較的多くの人々が行っていたことを考慮するとムスリムとしてのアイデンティティを失ったわけではなく、境界人としての両義的な要素を持ち合わせていたと思われる。

### 2-3-2-2. バルダーマ族

バルダーマ族に関する註釈も2つあり、タクシーフからイーワラータンの間でマッスーフア族とともに飲料水を販売していたところとカウカウからタカッターの間にバルダーマの領域についての記述のところである。前者の註釈は、ブルダーマとも読み、他のアラビア語史料の伝えるベルベル系遊牧民のパガーマに同じであり、ロート(Lhote)の説からソングアイ語トゥアレグ族のなかの貴族階級を指した名前である(家島 2002: 92)としている。後者の註釈は、ブルダーマ、パガーマとも呼ばれ、フラーニー族がトゥアレグ族を指して呼ぶ名称であり、もしくはソングアイ語でトゥアレグ族のなかの貴族階級を指した(家島 2002: 136)としている。フラーニー族とは、ハウサ族によるプロ Pullo(単数。複数がフルベ)の他称であり、フルベ族として以後記述する。フルベ族は「もともとセネガル河流域に住んでいたが、今日、西アフリカの大西洋岸からサハラ砂漠の南縁のサヘル地帯を東西に横切り、チャド湖南岸を通過してナイル川に至るまでの地域に分布している」(江口 1989: 365)。ソングアイ族は、「西アフリカを流れるニジェール川中流の大湾曲部、マリとニジェールにまたがって居住する部族」(赤坂 1989: 258)である。

なお、フルベ族は「大旅行記」には登場しない。バルダーマ族は、カウカウからタカッターの間の土地を領有していたが、後述する覆面の民とは違い通行料としての略奪は行っていなかった。彼らは、キャラバンの護衛と遊牧で生計を立てていたのではないと思われる。また、治安が余りにもよいため護衛を必要とせず数人で行動できたイーワラータンからマーッリーの間とは大きく状況が異なり、安全に旅をするにはバルダーマ族の護衛が必要であった。このことは、カウカウから東の領域に関してマリ帝国の直接的な支配が及んでいなかったことを推測させる。

### 2-3-2-3. ジャズーラ族

ジャズーラ族は、註釈によると、ベルベル人のサンハージャ系ラムータ族に近い集団でモロッコ南西部のスース地方に居住し、古くはアンティ・アトラス山脈の南側で遊牧生活を送っていたが、その一部は定住化し、ティーズニート(註:6)の南南西 80km のターグジージュトに活動の中心を置いた(家島 2002: 137)。また、アルモラビットの聖戦の宗教的・政治的指導者アブド・アッラーフ・イブン・ヤーシン(Abd Allah Ibn Yasin)はジャズーラ族出身の学者であり、彼の活躍でムラービト朝下、ジャズーラ族の勢力は大きく拡大した。「大旅行記」に登場するものとしては、タッカーダでイブン・バットゥータを世話した「マグリブ人たちの長老」のみがジャズーラ族であった(家島 2002: 137)。タッカーダは、イブン・ハルドゥーンによると、首長は覆面の民に属し、自らスルタンと称していた(家島 2002: 137)。

### 2-3-2-4. 覆面の民

覆面の民は、前述のとおりトゥアレグ族をあらわす。註釈によると、イブン・バットゥータの記録から推測すると、14世紀のトゥアレグ族の活動圏はサハラ砂漠とそのオアシス地帯だけでなく、その周辺部のガート、トゥワート、リビアのトリポリ付近まで、南部はチャド湖周辺、ニジェール川北岸地域、そして西部は大西洋の沿岸部まで広く拡大していたとされる(家島 2002: 146)。この註釈において、マッスーフア族が覆面の民として考えられているかどうかは書かれていない。しかし、西スーダンの中央部から西部にかけても活動圏が広がっていたとしているので、おそらくマッスーフア族も覆面の民として扱われていたと思われる。この註釈に付け加えるならば、「大旅行記」のイブン・バットゥータの記述によると、

特にカウカウからブーダーまでの間は覆面の民のハッカー族が直接支配しており(家島 2002: 75, 79)、西スーダン東部を中心に彼らは活動をしていただろうかと筆者は推測する。註釈によると、ハッカー族はアハッガルのことで、北部トゥアレグ族の支配階層カル・アハッガルの領有する地域、および彼らの部族名を指す(家島 2002: 146)。イブン・バットゥータの同行するキャラバンが彼らに襲われたときはラマダーン月であり、イブン・バットゥータは略奪そのものよりも、人を襲ったり、キャラバンの進行を邪魔したり、道端にある商品に関心をめしめたりすることをラマダーン月には行わないという慣行を破ったことに関してむしろ憤りを感じていた。この記述から、覆面の民は恒常的にキャラバンを襲撃し、いわば、税金の代わりに交易の利益を徴収していたと思われる。彼らが略奪を行った理由としては、14世紀は西アフリカの乾燥化が進行した時期であり(門村 1989, 竹沢 2003)、覆面の民の生活も非常に緊迫したものとなっていたことではないかと推測される。

覆面の民とマッスーフア族が異なる社会的集団であるならば、西スーダンの西部はマッスーフア族が、東部は覆面の民が、おもに活動をしていただろうと思われる。マッスーフア族は自らが交易の主体となっていたのに対し、覆面の民はむしろその他のベルベル人やガダーマサ人の交易の利益を徴収していた。また、マッスーフア族はスーダン人の慣習を取りいれムスリムとしての両義的なアイデンティティを形成していたのに対し、覆面の民はその名のとおり顔を布で覆うことによって覆面の民としての強烈なアイデンティティを保持していたと思われる。マッスーフア族はスーダン人の行政官に統治されその統治に協力的であった(註:7)のに対し、覆面の民は自ら直接的に統治を行っていた。こうした両集団の対称性を考慮するとそれぞれがまったく別の集団であった可能性があるかと筆者は考えている。

### 2-3-3. アラブ人

「大旅行記」に登場するアラブ人は4人である。そのうち3人がエジプト人であり、1人がダマスカス出身のシリア人である。アレクサンドリア出身の大商人は、マンサ・ムサがメッカ巡礼の際にした借金を取り返しに来ており、イブン・バットゥータは彼の墓を目にしている。その他の2人のエジプト人の詳細は記述されていない。また、イブン・バットゥータはダマスカス出身の女奴隷とアラビア語で会話をしている。奴隷交易は西スーダンからの一方通行ではなく、広くイスラーム世界のなかで交易のひとつとして行われていたのではないかと推測される。当然ながら頻繁に登場するベルベル人に比べるとアラブ人は圧倒的に少ないが、確実にイスラーム世界の中心との人的交流があったと考えられる。既に述べたが、イスラーム世界内での交流は非常に活発であり、家島(1983: 203)によれば、12世紀後半までの時期には、マグリブ地方と東方の諸地域との間の人的コミュニケーション、物資の交換と情報・知識の伝達関係には、概して大きな障害と隔たりはなく、自由な幅広い交流と融合の諸関係によって結ばれていた。

### 2-3-4. 商人集団

イブン・バットゥータは、ザーガリー村でワンジャラータと呼ばれる多くのスーダン人の商人を目撃している。ワンジャラータというのはこの地方の専門的な商人集団の代名詞であり、交易の盛んなスーダン地域には、早くもこの当時から専門の商人が生まれ、これらの商人集団は各地に分散し、ジュラ、マルカ、ヤルシ、ジャカンケなどと呼ばれ、それぞれの地方で活発に商業活動を行った(嶋田 1997, 坂井 1997)。これらの商人集団は、イスラームの伝播以前に成立していたのではないかとする考古学的発見がなされている(坂井 1997, 竹沢・シセ・小田 2006)。なお、彼らの活動については、生業の項に記述する。

## 2-4. 言語

言語についてイブン・バットゥータが言及しているのは一箇所だけである。

トゥンブクトゥの次の町、イブン・バットゥータが名前の忘れてしまったという町で、スーダン人でメッカ巡礼経験のある知事(アミール)がアラビア語を理解したこととアラビア語の書物を持っていたことである。

前者の逸話は要約すると以下ようになる。イブン・バットゥータがこのスーダン人の知事と対話を試みようとしたときに、言及されていないがおそらくスーダン人と思われる(註:12)、イスラーム法学者である書記にアラビア語で要求を記した板を渡している。イブン・バットゥータは、書記が知事にこの板の内容を通訳するものだと思っていたが、この書記はその板のアラビア語を知事の前で読み上げ、知事その内容を理解した(家島 2002: 67)。この逸話は、イスラーム法学者との間ではアラビア語で会話は難しかったのかもしれないが少なくとも筆談は出来たということ推測させる。このこ

ともまた他のイスラーム世界との交流を促進した要因であったのであろう。また、広くイスラーム世界において、アラビア語がどれだけ共通言語としての役割を果たしていたのか、ということについて今後調べるべき課題である。

後者のアラビア語の書物であるイブン・アルジャワジ(Ibn Al-Jawzi)の「驚嘆すべき事柄の書」の存在も大変興味深いものである。家島(2002: 131-132)によると著者のイブン・アルジャワジは、1126年生まれ、バクダードの最も著名なハンバリー派(註:13)の法学者であり、同時に伝承学者(註:14)、歴史家、説教師としても広く知られ、高等学院(マドラサ)での学問活動の他、政治・宗教の各方面にも活躍し、1200年に没した。彼の著書「提示に関する驚嘆すべき事柄の書」は「コーラン」、伝承集、法学書、歴史事実に基づく数々の格言や警句などを収録した書である(家島 2002: 132)。この書物をおそらくメッカ巡礼の行路で手に入れたのであろう。14世紀の西スーダンには小規模であったがイスラーム世界中心部との直接的な学術的・文化的交流があったことをうかがわせる。2-3で述べたとおり、少なくとも西スーダンにはシーア派のハワーリジュ派とスンナ派のマーリキー派の白人の集団がいたことは確かであり、両集団の差異はスーダン人にも認識されていた。こうしたイスラームの宗派の違いがスーダン人にどう受け止められたのか。また、スーダン人が宗派を主体的に選択していたのならば、どのような基準で宗派を取捨選択していったのか。以上の2点も今後の調べるべき課題である。なお、西スーダンの宗派の変遷はイスラームの段において述べたい。

## 2-5. 生業

ここでは、西スーダンの生業、具体的には、『大旅行記』に記述されている農業、ビーズ、織物、製鉄を考察したいと思う。

### 2-5-1. 農業

まず、「大旅行記」に頻出する食べ物についての記述を検討する。食習慣の区分は、大きく分けて西スーダンの3つの領域に区分される。(1)サハラ砂漠北部(スイジルマーサや北部トゥワート)のダルア(ナツメヤシの実)を中心とした地域、(2)西スーダン中央部(イーワラータン、マーッリー、カウカウなど)のアンリー、西瓜、米などの豊富な食料環境にあった地域、(3)西スーダン東部(タッガータや中、南部トゥワート)の穀物の得られない不毛な地域。

(1)註釈によると、スイジルマーサのダルアはぶどうと並んでマグリブ地方でも生産量が多く、良質であるため、サハラ交易の重要な商品になっていた(家島 2002: 148)。イブン・バットゥータもダガーザーにスイジルマーサのダルアがあることを記述している。スイジルマーサ以外にもブーダーやイーワラータンにもナツメヤシがあることを記述しているが、そのほかの場所での記述はない。西スーダンにおいては、それほど重要な位置にはなかったと思われるがサハラ砂漠では中心的な食料であり、現在でも交易の重要な商品としてなっている(南里 1992, 1999a, 1999b)。

(2)西瓜は、2回、また大瓜というのが1回登場している。註釈によると、西瓜は、おそらくラテン名の *Citrullus unglaris* に当たる(家島 2002: 94)。大瓜は、きゅうり *Cucumis sativus* の一種で、細長く大型のもので、マグリブ・アラビア方言では、メロン、瓜のことをさし、ドゥズィ(R. Dozy)は、誤写により縞模様に入ったキュウリと解釈した(家島 2002: 133)。アル・バクリ(Al-Bakri)によるとサハラ砂漠の交易都市アウダグストではキュウリが豊富にあった(家島 2002: 133)。アンリーは註釈によると、ベルベル語でアンリー、イッラーンは、モロコシの一種 *Pennisetum typhoideum* をさす(家島 2002: 89)。なお、*Pennisetum typhoideum* は草姿がトウモロコシに似たイネ科の植物トウジンビエである。また、米は、アフリカ稲のことで、アジア稲とは別系統で発達した栽培種の米であり、西スーダンの稲作は雨季作にのみ特化し、きわめて労働粗放的である(応地 1997)。イブン・バットゥータがカウカウで豊富に物資があることを記述しているように、西スーダン中央部のニジュール川内陸三角州と呼ばれる広大な氾濫原において生産される多量の農作物が都市の発展を支えていたのは疑いない。なお、竹沢・シセ・小田(2006)によれば、メマ地方のフォニオの栽培がガーナ王国やマリ帝国の成立に寄与したとされるが、『大旅行記』には、メマ地方に関する記述が皆無であり、14世紀になると乾燥化が進み、ニジュール川内陸三角州に農業と政治の中心が移っている。

(3)タッカーダは穀物をすべて外部に頼っており、タカルカリーにおいては、その住民は穀物の存在すらしなかった。輸入していない食料は、おもに乳や山羊の肉であり、遊牧を営んでいたと推測される。このことは、彼らの生活を保障するだけのサハラ砂漠と西スーダンとの恒常的な交流が、すでに成立していたことを示唆している。

### 2-5-2. ビーズ



ビーズは、ガオの白人居住区からその作りかけなどがでている。イブン・バットゥータ以前のアラブの地誌家はこのガオが2つの町からなっており、ひとつには白人の交易者が、もうひとつには黒人の王が住むと書くのがつねであった。しかし、ガオがマリ帝国に併合されることによってその王とは商業都市に吸収されたのでイブン・バットゥータは2つの都市の存在については記していない(竹沢 2003)。ガオのサネと呼ばれる白人居住区は発掘が行われている。カーボン分析によれば 1100~1300 年にわたるこの遺跡からは、400 点以上の、ガラスや冬季、銅、鉄、輝石、骨で作られたビーズが出土し、このほかにも、ガラスの加工に用いられたと思われる坩堝や土製のランプ、素焼きの壺や水差し、鉄製の道具、穀物倉、大量の米などが出土している(竹沢 2003)。また、竹沢(2003)はビーズのいくつかは加工途中で破棄されたものであることから、この都市が交易だけでなく、手工業都市であったとしている。後述するが、ビーズはガラス製装身具として「大旅行記」に登場し、ニジェール川大湾曲部では通貨の代わりとして使われていると記述されている。

### 2-5-3. 織物

イブン・バットゥータは、イーワラータンからマーッリーまでの間に樹木のなかで機織りの道具を備えて織物を織っている織工を目撃したと記述している。樹木のなかで織っているという記述は、歪曲であると思われるが、現在も戸外であるように(川田 1997c)、当時も機織りが戸外で行われていたという事実をあらわしていると思われる。西アフリカにおいて衣服は威信の象徴であり、特権的地位とりわけ王権と結びついている。織機を持ちイスラーム化したマンデ起源(註:11)のジュラなどの交易商人がイスラーム教徒ともに着衣の慣習を普及させた。また、川田(1997b)によれば、北アフリカの機織機と異なり、西スーダンの機織機は、小さく解体可能であり、西スーダンにおいて機織りは非常に世俗的で能力さえあればだれでもでき、機織りの作業期間が1年中に及ぶことはまれである。竹沢(1998)によれば、現在のものとは種類の異なる紡錘がメマ地方の新石器時代の遺跡で発見され、布の生産が従来より遡るとすれば、後述するがすでに大量の溶鉄炉が発見されているメマ地方で鉄と布の生産がセットになった可能性があるとしている。

なお、稲、その他の栽培作物、コーラナツツ、綿と毛の布、しばり舟のうち、布を織る技術をのぞいては、イスラームの果たした役割は二次的なものとされる(竹沢 1990b)。

### 2-5-4. 製鉄

一般に知られているように製鉄の技術がサハラ以南で独自に始まっていた。竹沢(2003)によると、メマ地方では鉄の製造が紀元前数世紀には開始され、西暦紀元後の遺跡のほぼすべてに製鉄遺構が見られ、ベレルという遺跡には500を超える溶鉄炉の跡が存在するなど「工業的」と称されるほどの段階に達していたことが確認されている。メマで生産された大量の鉄は、西スーダンの王国の原動力のひとつであり、13世紀にはマリ帝国のスンジャータ(Sundiata)王がこの土地に逃れ、その人々の助力によって、敵国スースの鍛冶の王を打ち破ってマリ帝国を建国したと伝承は語っている(竹沢 2003)。竹沢(2003)は製鉄や窯業のために大量の樹木が消費されたことと乾燥化により、メマ地方に流れていたニジェール川の支流が枯れ、メマ地方の遺跡の大半は16世紀までに破棄されたとしている。イブン・バットゥータもメマ地方を訪れているが、鉄に関する何を一つ記述していない。14世紀にはもうすでにメマ地方の溶鉄炉はほとんど使われていなかったのではないかと推測される。なお、メマではBC850年ごろにはじまる新石器後期の遺跡から大量のフォニオが出土し、栽培化が開始されたとすれば、メマ地方での製鉄遺構とともにガーナ王国の成立やマリ帝国の成立に大きく貢献した(竹沢・シセ・小田 2005)。

### 2-6. 交易と通貨

トゥンブクトゥやジェンネなどの都市は、サハラ砂漠を縦断する交易の南の終結点であったが、さらにニジェール川を行き来する船運によって結ばれ、トゥンブクトゥからはサハラ砂漠からは運ばれた岩塩が、ジェンネでからは森林地帯から運ばれた金が交換された。マリ帝国の経済的基盤はこの塩金交易にあったというのが定説である(嶋田 1997, 私市 2004)。西スーダンからの金を用いてモロッコの交易都市スィジルマーサで鑄造された金貨は、ヨーロッパ世界でも広く流通していたことが知られている(竹沢 2003, 私市 2004, 金七 1981)。しかしながら実際のところ、イブン・バットゥータは塩金交易について極端に多く記述をしているわけではない。白人はおろか、マリ帝国の権力からも金鉱山を領域としていたスーダン人は独立しており、イブン・バットゥータもたいした情報が得られなかったと考えられる。坂井(1997: 233)によれば、王権は、西スーダンでは土地の所有権をもっておらず、例えば、18世紀末にセネガル川流域の金産地ブレにおいて、首

長は細工を始める日を決め成功を願う儀礼を行う権限を持つだけで、採掘に関しては他の住民と変わらない。

奴隷については、『大旅行記』には以下の 5 点の記述がある。(1)タッカーダを出発するときにイブン・バトゥータが同行したキャラバンに 600 人ほどの女性奴隷が加わっていた。(2)イブン・バトゥータもタッカーダにおいて、教養のある女奴隷を購入しようとし、その町の法官から 1 人女奴隷を買った。(3)タッカーダ、イーワラータン、マーッリーの商人たちは互いに競い合って多くの男奴隷と女奴隷を所有していた。(4)タガーザーにおいても、マッスーフア族の所有する多くの奴隷がいた。(5)ダマスカス出身の女奴隷が西スーダンにいた。以上の 5 点から、以下の 3 点が推測される。(1)西スーダン内では、広く奴隷の取引が行われていた。(2)北アフリカにも多くの奴隷が輸出されていた一方で、少量と推測されるが北アフリカからも奴隷が輸出されていた。(3)イスラーム世界では、異教徒を奴隷とすることは禁止されておらず、法学者であるイブン・バトゥータも奴隷を所有することに抵抗がなく、北アフリカにもそれなりの需要があった。

アンリーの長距離取引が行われており、そのことについては、以下の 2 点の記述がある。(1)イーワラータンにザーガリー村からアンリーが輸出されていた。(2)タガーザーはスーダン地方からアンリーを輸入していた。以上の 2 点からニジュール川大湾曲部が西スーダン中央部とサハラ砂漠の一部にわたる広範囲において食糧供給機能を果たし、それを可能とする農業生産力をすでに保持していたことが推測される。

西スーダンに共通する通貨というものは存在していなかった。なお、イブン・バトゥータはある土地での価格が他の地域よりも格段と高くなっていた場合、金を尺度として説明しているが、一般の民衆の日常的取引に金が使われることはなかったのであろうし、『大旅行記』にもそのような記述はない。通貨の代わりとして使われているものは、西スーダンでも地域によって異なり、大きく分けて 4 つの地域に分けられる。(1)ダガーザー、塩(2)イーワラータンからマーッリーの間、塩・ガラス製装身具・生薬、(3)カウカウとマーッリー、子安貝(4)タッカーダからトゥワートの間、布地。共通の通貨の不在は、統一の強力な国家の不在を表すとともにそれぞれの地域でなにかしらの政治的、経済的、文化的類似性があったことが推測できる。

## 2-7. イスラーム

西スーダン人のイスラームの実践について、イブン・バトゥータの記述を見る限りでは、それほどレベルの低いものではない。男女関係の緩さや女性のヴェールや衣服の無着用、禁忌の食べ物を食べるといったことを批判しているものの、礼拝やコーラン暗誦の熱心さを賞賛し、複数の町においてイスラームの教授がいること、またスーダン人の学生がいることも記述しておりマドラサの存在を暗示している。前述したように、かなり少数ではあるものの、メッカ巡礼経験者もイスラーム世界の中心部の書物もスーダン人社会はもっており、かなり高度なイスラームの実践が行われていたと推測される。2-3 でとりあげたように、14 世紀にはすでに複数の宗派のムスリムが到来していた。歴史的には、西スーダンに最初に入ってきたムスリムはハワーリジュ派の中では比較的穏健なイバーディー派の人々であったらしいが、やがてスンニ派が勢力を伸ばし、スンニ派のマーリキー派の法学が学問研究の基本的なスタンダードになっていった(坂井 2003)。

北アフリカと西スーダンを行き来するベルベル商人が西スーダンのイスラームの重要な役割を担っていたのは言うまでもない。しかし、この時期の西スーダンのムスリムの活動の評価には留保が必要である。西スーダンのイスラーム化の度合いについては、『アフリカ研究』の上で激しい論争がなされている(嶋田 1988, 1991, 竹沢 1988, 1990a)からである。

議論の本質的な争点は 19 世紀のフルベの聖戦の評価であり、また、商人によるイスラーム化を積極的に評価した竹沢(1988, 1990a)も西スーダンの各地にイスラームを広めたマンデ系の人びとの活動に重点をおいている。集団をさす名称としての「マンデ」の概念は植民地的および民族誌学的文脈で作られたものだが、現地の社会・文化的概念にあり、マリ帝国の「マリ」をさすマリンケ語の「マンデン」ないしは「マンディング」に由来するもので、実際の歴史上のマリ帝国の版図としてのものでなく、西スーダンの内陸に広大な政治的・社会的統合を創出したマリに関わる、歴史的・地政学的知識の総覧に他ならない(坂井 2003: 45-46)。したがって、マンデ系というアイデンティティの形成自体がマリ帝国とその衰退後に密接に関わっており、14 世紀においては、マンデ系としての活躍は初期的でまだそれほど影響がなかったと考えられる。そのため、商人と一部の支配階層を除いてはイスラーム化していなかった(嶋田 1988: 2, 1991: 76)とみるのが妥当であろう。14 世紀において、イスラームは王権と深く結びついていたことは疑いようがない。坂井(1997: 237-238)に指摘されるように、王権はムスリム商人による地域外交に依存していただけでなく、外部性という象徴装置としてイスラームを受容していた。つまり、王権がイスラームに改宗したことは、「伝統宗教」を信仰していた多数派である農耕民などの定住民との差異を強調する外部性を獲得するためであった。このことから、14 世紀においては、商人と一部の支配階層のみにイ

スラームの信仰が限定されていたことが証明される。

このように、ムスリムが14世紀の西スーダンにおいて少数派であったにもかかわらず、イブン・バットゥータの共感を抱かせるような西スーダンのイスラームについての記述から受ける印象とのこのギャップは、そもそもイブン・バットゥータはイスラーム世界としての西スーダンを旅していた、一例を挙げるならば、バルベル人やスーダン人のムスリムの家に寝泊りをしていた、といったことに起因していると考えられる。

### 3. 「世界経済」

2において、西スーダンの個別的要素について検討した。それらから明らかになった北アフリカとの差異と西スーダン内での差異を交通、帰属意識、生業と住民という観点で再検討し、最後に「世界経済」としての西スーダンを総括したいと思う。

#### 3-1. 交通

まず、2-1で述べたようにウォーラーステイン(1981)は「世界経済」の規模は技術水準、とりわけ域内の交通・通信の水準に対応し、具体的には、最も早い交通機関を利用するとして60日で移動できる範囲内であるとしている。図1を参照するとわかりやすいが、イブン・バットゥータはスイジルマーサからマーッリーまでの移動日数は67日、タカッターからスイジルマーサまで91日かかっている。マーッリーからタカッターまでの具体的な日数はわからないが、おそらく60日をこすことはないだろう。マリ帝国の首都であったマーッリーを中心にして考えてみると北はスイジルマーサの手前、西はトゥワートの南部ぐらいが60日で移動できる範囲であり、目安としてこの範囲内が「世界経済」としての西スーダンの境界内と考えられる。

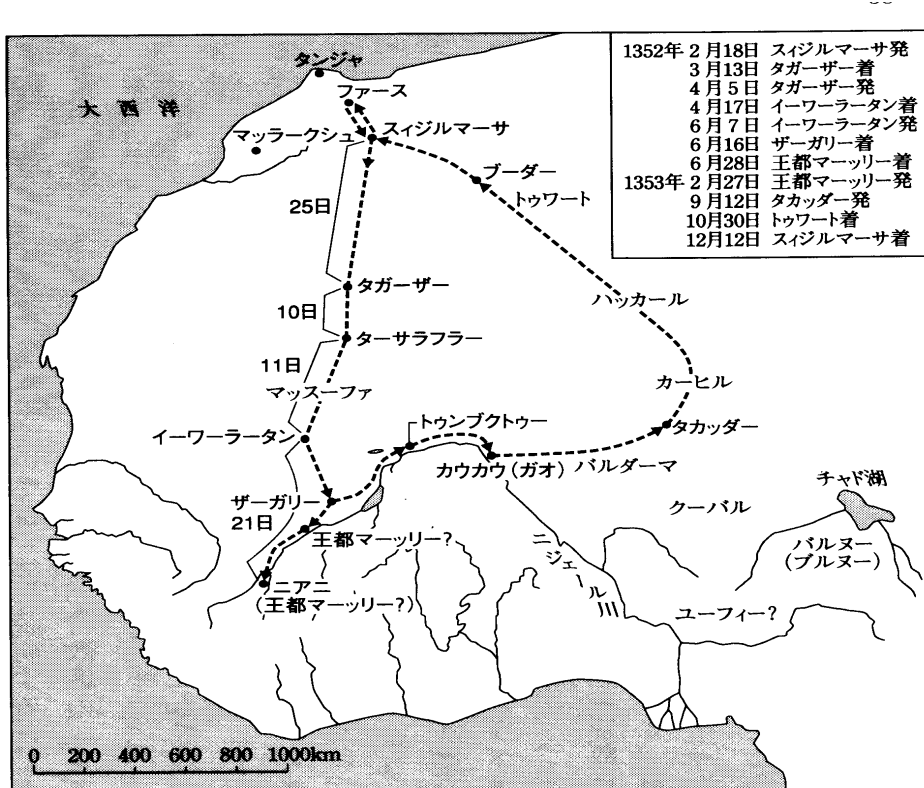


図1. イブン・バットゥータのマーッリー旅行の全行程 (家島 2003: 38)

#### 3-2. 帰属意識

2-2で考察したように、イブン・バットゥータはイスラーム世界の一地域として西スーダンをとらえているとともに奥地にまったく別個の異教徒の世界を想定している。3-1で提示された境界付近でのイブン・バットゥータの記述を再検討する。スイジルマーサからイーワラータンまでの行路をイブン・バットゥータが同行したキャラバンの隊長とイブン・バットゥータが女性の振る舞いについて口論となったときに両者は興味深い発言をしている。「そもそも汝はいぜんにわれわれの国に住み、イスラーム聖法のことをご存知のはずだが」「われわれのもとでは、女たちが男たちと一緒にいても許さ

れることであり、立派な行いであって、とやかく言うべきではない。そもそもこの女は、あなたの国の女とは違いますからね」(家島 2002: 32)前者がイブン・バトゥータの発言であり、後者がキャラバン隊の隊長の発言である。イブン・バトゥータにとっての「われわれの国」とはマリーン朝モロッコであり、マグリブ世界であるのに対し、スイジルマーサとイーワラータンを行き来するキャラバン隊の隊長の「われわれのもと」とは、イブン・バトゥータの「われわれの国」とは異なるところ、すなわちマグリブ世界と対比される西スーダンを表していると考えられる。すなわち西スーダン世界との塩金交易を担っていたベルベル商人たちは、マグリブ世界ではなくむしろ西スーダンに帰属意識を持ち、彼らやイブン・バトゥータはスイジルマーサ以南を西スーダン世界と捉えていたと考えられる。また、イブン・バトゥータはトゥワートのもっとも大きな村の一つであるブーダーにおいてこう記述している。「そこ(筆者註、ブーダーをさしている)には穀物やバター、オリーブ油[など]はなく、そうしたもの[すべて]はマグリブ地方からそのために輸入されたものだけである」(家島 2002: 80)この記述からイブン・バトゥータはブーダーをマグリブ地方とは区別して捉えているものと考えられる。

以上のことを考慮するとイブン・バトゥータはブーダーなどのトゥワート地方も含むスイジルマーサ以南をマグリブ世界とは異なった西スーダンとして捉えていたと考えられる。

### 3-3. 生業と人びと

また、西スーダン内部でも大まかな区分が存在するように感じられた。まず、西スーダンの構成員についても一度振り返ってみよう。2-3 で考察したように、大雑把に考えて、①スイジルマーサからイーワラータンにかけてはマッスーフア族が、②ニジュール川大湾曲部ではスーダン人が、③タッカーダからスイジルマーサにかけては覆面の民が多数派として居住していた。また、トゥンブクトゥにおいては、覆面をしたマッスーフア族が住民の大半であった。西スーダンはおもにこの3つの集団で構成されており、それぞれが独自のアイデンティティを保持しながら、3-2 で考察したように西スーダンに帰属意識をもっていたと考えられる。

2-5 において考察したとおり、農業においては、①サハラ砂漠北部(スイジルマーサや北部トゥワート)のダルアを中心とした地域、②西スーダン中央部(イーワラータン、マーッリー、カウカウなど)のアンリー、西瓜、米などの豊富な食料環境にあった地域、③西スーダン東部(タッカーダや中、南部トゥワート)の穀物の得られない不毛な地域に分類される。③は覆面の民の領域と一致するが、①、②はマッスーフア族やスーダン人の分布に一致しない。むしろ、この分布は自然環境に影響されていると考えられる。また、前述したが、③のような穀物の得られない不毛な地域に人びとが生活を営むことが出来るのは、②の地域との恒常的な交流が前提となっており、①においても、前述したとおり、ダルアは交易用に用いられており、近隣諸地域との交流が想定される。

2-6 において考察したとおり、通貨については、①ダガーザー、塩②イーワラータンからマーッリーの間、塩・ガラス製装身具・生薬③カウカウとマーッリー、子安貝④タッカーダからトゥワートの間、布地、の4つの地域に分類される。①、②の塩については、マッスーフア族による塩金交易が非常に盛んであったこと証明するとともに、彼らの活動地域とほぼ一致する。生薬、子安貝については、供給源がわからなかった。これらの供給源を探ることも筆者の今後の課題である。布地についても具体的な供給源はわからないが、2-5 で考察したことを踏まえれば、ニジュール川大湾曲部において14世紀には広くスーダン人の間で機織が行われていたのではないかと推測される。ガラス製装身具については、2-5 でとりあげたように、ビーズの工業的ともいえる生産がメマ地方で行われており、これに対応してニジュール川大湾曲部では、ガラス製装身具が流布していたと推測される。通貨の不一致は、経済上の問題というよりも強固な政治の支配がなかったことを反映していると考ええる。実際、イブン・バトゥータが売買において不自由を感じたとする記述も見られず、また、2-3-4 において考察したように、古くから商人集団が西スーダンで交易活動を行っており、経済的な弊害があったとは考えられない。さらに、「点と線」の支配であると「はじめに」で記述したように、西スーダンにおいて強力な王権は存在していなかった。つまり、西スーダンという領域内での通貨の不一致は、経済上の統一性の欠如というよりも、強力な王権による政治的統一の欠如と説明できると考える。

### 3-4. 総括

以上の考察は、2-1 で述べた、一体感、地理的な分業、その内部が自給的で自発的であることを証明するものである。西スーダンを構成する成員である、マッスーフア族、スーダン人、覆面の民、の三集団は、それぞれが独自のアイデンテ

ィティを保持しながら、西スーダンに帰属意識をもっており、これは一体感と呼べるであろう。地理的分業も、農業においては生態学的差異に基づく、地理的分業を行い、産業においても、塩、金、布、ビーズの地理的分業が証明された。これらが、内部の自給的で自発的であることは、農業起源が西スーダン内部に求められること(竹沢・シセ・小田 2005)、布、ビーズも起源が西スーダン内部であり(竹沢・シセ・小田 2005)、小規模であったと想定されるが塩と金の交易はアラブ到来以前から行われており(金七 1981, 私市 2004)、自発的であった。金は例外的に主にマグリブを通してイスラーム世界全体に流れ、他のものも外部との交換が行われていたが、自給的に行われていた。内部の自発性、自給性もやはりこのように証明できた。また、西スーダンという領域内での通貨の不一致は、経済上の統一性の欠如というよりも、強力な王権による政治的統一の欠如と説明でき、「世界帝国」ではなく「世界経済」といえる。これらの考察によって、まさに 14 世紀の西スーダンが「世界経済」として成り立っていたことが証明された。

## 結論

14 世紀の「世界経済」としての西スーダンについて、イブン・バトゥータの「大旅行記」を中心に検討してきた。その結果、西スーダンを構成する成員である、マッスーフア族、スーダン人、覆面の民、の三集団は、それぞれが独自のアイデンティティを保持しながら、西スーダンに帰属意識をもっており、農業においては生態学的差異に基づく、地理的分業を行い、産業においても、塩、金、布、ビーズの地理的分業が行われ、積極的な交流がなされていた。農業起源が西スーダン内部に求められること(竹沢・シセ・小田 2005)、布、ビーズも起源が西スーダン内部であり(竹沢・シセ・小田 2005)、小規模であったと想定されるが塩と金の交易はアラブ到来以前から行われており(金七 1981, 私市 2004)、外部との関係を持ちつつ、「点と線」とされる緩やかな政治支配のなかに、自給的な交流がムスリム商人集団によって活発になされていた。これらがウォーラーSteinのいう「世界経済」の特徴と合致しており、14 世紀の西スーダンは、強い緊張関係にあるわけだけでなく、交易などの商業活動を通じた緩やかな 1 つの世界、「世界経済」が形成されていたことが明らかになった。

さて、「はじめに」で述べたとおり、本稿の目的は筆者が新たな課題を見つけることでもある「大旅行記」にはマーッリーの王の衣服に関する記述が詳しく、絹やビロード、エジプト製の高級衣服などが登場しており、これについて地中海世界やシルクロードとの関係といった世界規模の交易ネットワークを調べることも課題である。なお、本稿では時間が足りず、これについて考察することができなかった。また、本稿では「世界経済」の初期段階の 14 世紀の西スーダンをとりあげたが、この時代の前後の西スーダンを調べることで、西スーダンの「世界経済」の歴史の変遷を明らかにすることも残された課題である。その歴史の変遷を考えるうえで、南北の交流を促した沙漠化に始まるサハラ交流のネットワーク形成やサハラと西スーダン、サハラとマグリブがどのようなインターアクションを起こしたかということが目下最大の関心事である。本稿を足がかりとして今後の研究に繋げていきたい。

## 註：

1. ジブラルタル海峡に面する、現在のタンジール
2. Mansa Musa I (在位 1312~1337) : 1324~1325 年に、膨大な黄金を持参して豪華なメッカ巡礼を行ったことで有名な王。
3. タカッターの町でイブン・バトゥータはマッスーフア出身のジャファル・ブン・ムハンマドにもてなされた(家島 2002: 71)。町の記述としては、イーワラータンやトゥンブクトゥの記述とは異なり、この町にマッスーフアの人が多く住んでいるという記述はない。
4. 自分に父親の名前をつけることがなく、母方の叔父の名前を付ける。このことをイブン・バトゥータは男に自尊心がないと非難している(家島 2002: 30)。
5. 男には一切の相続権がなく、男の息子の代わりにその男の姉の息子たちだけに限られている。これもまた、イブン・バトゥータは男には自尊心がないと非難している(家島 2002: 30)。
6. モロッコ南部の町。
7. イーワラータンにおいてイブン・バトゥータは「彼の前にはやりや弓矢を手にした護衛兵たちが、さらに彼の背後にはマッスーフアの名士たちが控えていた」(家島 2002: 27)とある。
8. シーア派の一つ。ウマイヤ家との妥協を図ったアリーを殺害しウマイヤ家批判を貫こうとした一派。
9. あくまでも妥協を配するピューリタンの理想主義に立つハワリージュ派のなかでイバーディー派はそのピューリタニズムを守るために、むしろ信仰を個人の内面の問題とし、世の権力者などと無益な軋轢を引き起こさない立場をとる(嶋田 1997)。
10. スンナ派の一つ。北、西アフリカで優勢である。
11. ベレテ、トゥレ、シセ、サガノゴ、ジェネのこと。あるいは、シセ、ジェネの代わりにハイダラとフォファナの場合もある(坂井 2003)。
12. バルベル人であるならば、わざわざアラビア語で筆談をする必要はなかったはずである。
13. スンナ派の一つ。アラビア半島で優勢である。
14. 預言者ムハンマドと直接接した人が彼の行ったこと、言ったことばを記憶して、人々に伝えた言い伝えである伝承(ハディース)を研究する人。

## 文献目録

赤坂賢

1989 「ソンガイ」、伊谷純一郎・小田英郎・川田順造・田中二郎・米山俊直編『アフリカを知る事典』:258-259、平凡社

阿部年晴

1999 「世界観とその表象」、川田順造編『アフリカ入門』:321-348、新書館

Cuoq, J.

1975 *Recueil des sources arabes concernant l'Afrique occidentale*. Paris: CNRS.

江口一久

1989 「フルベ」、伊谷純一郎・小田英郎・川田順造・田中二郎・米山俊直『アフリカを知る事典』:365、平凡社

金七紀男

1981 「中世末におけるスーダンの金とポルトガル」、『東京外国語大学論集』31: 299-315

門村浩

1989 「サハラ南縁地帯における歴史時代の干ばつと砂漠化」、『アフリカ研究』34: 73-86、日本アフリカ学会

川田順造

1993 『アフリカ』、朝日新聞社

1997a 「ニジェール川大湾曲部の自然と文化」、川田順造編『ニジェール川大湾曲部の自然と文化』:1-47、東京大学出版会

1997b 「物質文化からみたニジェール川大湾曲部」、川田順造編『ニジェール川大湾曲部の自然と文化』:47-103、東京大学出版会

私市正年

1983 「Ibun Tumart とムワッヒド集団の形成過程(前)」、『イスラム世界』21: 1-21、日本イスラム協会

2004 『サハラが結ぶ南北交流』、山川出版社

Levtzion, N and J. F. P. Hopkins

1981 *Corpus of early Arabic sources for West African history*. Cambridge: Cambridge University Press.

那谷敏郎

1984 『紀行 モロッコ史』、新潮社

南里章二

1992 「アザライ(塩の隊商)―現代におけるその活動の実態」、『アフリカ研究』41: 75-90、日本アフリカ学会

1999a 「カワール―そのオアシスと交易」、『兵庫地理』44: 34-43、兵庫地理学協会

1999b 「アザライとキャラバン・コンボイ―サハラ長距離交易の歴史と現代」、『季刊民族学』23: 88-109、千里文化財団

応地利明

1997 「マリ国におけるミレット農耕形態の諸類型と分布」、川田順造編『ニジェール川大湾曲部の自然と文化』: 147-186、東京大学出版会

坂井信三

1997 「西アフリカの王権と市場」、佐藤次高・岸本美緒編『市場の地域史』:209-248、山川出版社

2003 『イスラームと商業の歴史人類学 ―西アフリカの交易と知識のネットワーク』、世界思想社

嶋田義仁

1988 「西アフリカ・イスラム化パターンの3類型と「フルベ族の聖戦」」、『アフリカ研究』33: 1-18、日本アフリカ学会

1991 「西アフリカのイスラム化と交易 ―Trimingham 説再論」、『アフリカ研究』35: 75-85、日本アフリカ学会

1997 「トランス・サハラ交渉史」、宮本正興・松田素二編『新書アフリカ史』:180-209、講談社

竹沢尚一郎、ママドゥ・シセ、小田寛貴

2005 「西アフリカ史のなかのメマーガーナ王国とマリ帝国を支えた経済活動」、『アフリカ研究』66: 31-46、日本アフリカ学会

竹沢尚一郎

1988 「西アフリカのイスラム化にかんする一考察―歴史主義批判」、『アフリカ研究』32: 19-43、日本アフリカ学会

1990a 「ジハード史観を脱却すべきではないか―嶋田氏の批判に答える」、『アフリカ研究』36: 31-43、日本アフリカ学会

1990b 「イスラムと西アフリカの物質文化」、『国立民族学博物館研究報告別冊』12: 533-593、国立民族学博物館

1998 「西アフリカの農業の起源と考古学の現状」、『アフリカレポート』31: 46-49

2003 「帝国の繁栄とその遺産 ―西アフリカ」、『季刊民族学』27: 56-59、千里文化財団

家島彦一

1983 「マグリブ人によるメッカ巡礼記 al-Rihlat の史料性格をめぐって」、『アジア・アフリカ言語文化研究』25: 194-216、アジア・アフリカ言語文化研究所

1996 『大旅行記 1』、東洋文庫

2002 『大旅行記 8』、東洋文庫

ウォーラーズテイン、I.

1981 『近代世界システム I、II』、川北稔訳、岩波書店